

前回はヨセフが「私はヨセフです」と兄弟達に明かした箇所を読みました。時が満ち、涙の再会の出来事でした。

### 1. パロの喜びと意向 (16～20節)

①パロも喜び (16)「**ヨセフの兄弟たちが来たという知らせが、パロの家に伝えられると、パロもその家臣たちも喜んだ。**」パロの記事は 41章からありませんでしたが、再びの登場です。ヨセフが兄弟達に自らを明かした事が周りの者達に伝わり、パロの耳にも届いたのです。すると、パロも家臣たちも共に喜んだというのです。それほどに、ヨセフはパロと家臣達に信頼されていたということでしょう。外国出身の宰相であってもヨセフの働きは彼らを納得させていたのです。

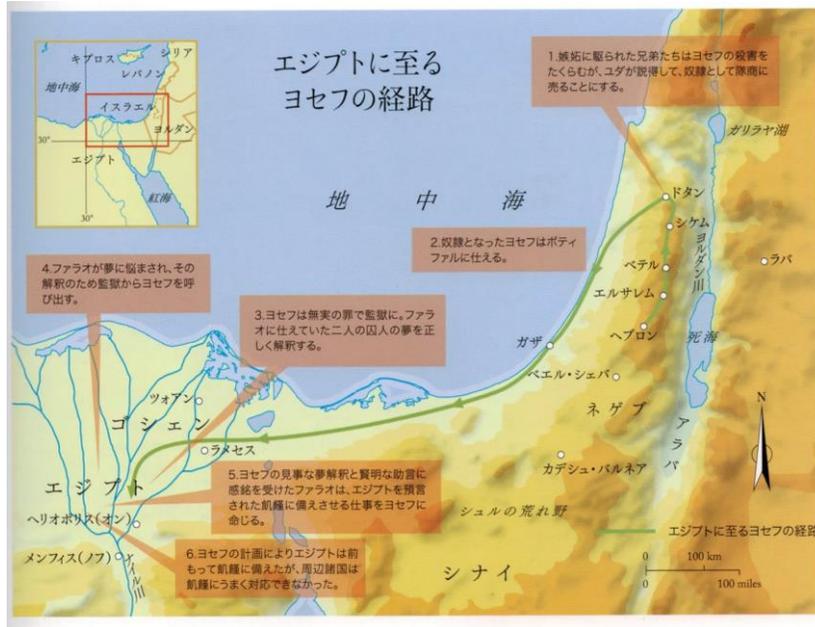
②父と家族を連れて (17～18)「**パロはヨセフに言った。『あなたの兄弟達に言いなさい。“こうしなさい。あなたがたの家畜に荷を積んで、すぐにカナンへ行き、あなたがたの父と家族とを連れて、私のもとへ来なさい。私はあなたがたにエジプトの最良の地を与え、地の最も良い物を食べさせる”』**そして、早速ヨセフに言ったのです。それはヨセフの兄弟達へのメッセージです。その内容は、家畜には食糧などの荷を積んで、カナンへ急ぐこと、着いたらできるだけ早く、父親(ヤコブ)と一族郎党を連れてエジプトに戻って来るようにというものでした。そして、エジプトに来れば、最良の土地を与え、食糧も豊かに備えられるという保障付きでありました。

③父を乗せて (19～20)「**あなたは命じなさい。『こうしなさい。子どもたちと妻たちのために、エジプトの地から車を持って行き、あなたがたの父を乗せてきなさい。家財に未練を残してはならない。エジプトの全土の最良の物は、あなたがたのものだから』**と」さらに、年長いた父親と子供達や妻たちのために、当時では貴重な車を提供するというほどの配慮をパロはしてくれました。それゆえ、家財などに未練を残さず、体一つで来れば、必要な物は一切用意するからといった言葉もありました。まさに至れり尽くせりです。

### 2. カナンへの帰国準備 (21～24節)

①パロの命に従い (21)「**イスラエルの子らは、そのようにした。ヨセフはパロの命により、彼らに車を与え、また道中のための食糧も与えた。**」兄弟達はカナンへ帰る準備をしたのです。ヨセフもパロに言われたように、車の調達もしたのです。帰国の旅のための食糧も荷に積み、一刻も早く父の元に良き知らせを持って行こうとしました。

②兄弟への贈り物 (22)「**彼らすべてにめいめいの晴れ着を与えたが、ベニヤミンには銀三百と晴れ着五枚とを与えた**」ヨセフは兄弟各自に晴れ着も与えました。旅とは別に公の場に使う着物です。かつてはヨセフを売りはらった兄弟達は、その恩恵に恐れ入ったことでしょう。ヨ



セフはベニヤミンには特別の贈り物をしました。銀三百と晴れ着も五枚。この特別扱いを、かつては父のヨセフへのひいきを妬みましたが、今回は兄弟達も受け入れたことでしょう。

- ③父への贈り物 (23~24)「父には次のような物を贈った。エジプトの最良の物を積んだ十頭のろば、それと穀物とパンと父の道中の食糧とを積んだ十頭の雌ろばであった。こうしてヨセフは兄弟たちを送り出し、彼らが出発するとき、彼らに言った。『途中で言い争わないでください。』ヨセフから父への贈り物は、十頭のろば、穀物、パン、道中の食糧。これらの荷物を背負う十頭の雌ろばも加えられていました。そしていよいよ出発です。ヨセフの兄弟達へのアドバイスは、途中で兄弟げんかをしないでください、というものでした。エジプトで生活することについてなど、言い争いのネタはいくつもありました。

### 3. ヤコブへの報告 (25~28 節)

- ①カナンへの帰国 (25)「彼らはこうしてエジプトから上って、カナンの地に入り、彼らの父ヤコブのもとへ行った。」さて、彼らはカナンの地に入りました。山や谷などを計算にしなければ、900 キロほど。相当の日数はかかったことでしょう。それでもようやくにして、父ヤコブのもとへと到着しました。
- ②父ヤコブに告げる (26)「彼らは父に告げて言った。『ヨセフはまだ生きています。しかもエジプト全土を支配しているのは彼です。』しかし父はぼんやりしていた。彼らを信じるができなかったからである。」早速告げたことは言うまでもありません。「お父さん！弟のヨセフは生きていたのです。それもエジプトを事実上、統治をしているのが彼なのですよ！」それを聞いても、父ヤコブはぼんやりしていました。息子達だって、目の前にいるヨセフにそれを明かされた時、啞然としていたのです。今、ヤコブが息子達の話しを聞いたところで、信じるができなかったのは当然でした。
- ③ヤコブは元気づき (27~28)「彼らはヨセフが話したことを残らず話して聞かせ、彼はヨセフが自分を乗せるために送ってくれた車を見た。すると彼らの父ヤコブは元気づいた。イスラエルは言った。『それで十分だ。私のヨセフがまだ生きているとは。私は死なないうちに彼に会いに行こう。』」それでも、息子達は熱心かつ臨場感豊かに話しますし、彼らが持ち帰って来た「車」を見て確かめると、ヤコブも彼らの言う事も嘘ではなさそうだと思うようになりました。そして、それが夢でなく本当ならば、実に喜ばしいと、元気が湧いてきました。そしてイスラエル (ヤコブ) は「よくわかった。ヨセフがまだ生きていたら、まだ元気なうちに何としても会わなくてはならない。」と彼は、息子達に答えたのでした。生きている間に、なんとしてもあの息子ヨセフに会いに行こうと決めたのでした。

《結論》二十年という年月は経過してしまえば、あっという間です。しかし、その間に赤ん坊は成人し、小中学生は社会人となり、家庭を形成する場合もあります。青年は中年となり、中年は初老となり、初老は熟年へとなくなっていきます。姿形も年齢に応じて変化をしていきます。社会における立場も変わり、家族の居場所や人間関係も変化していきます。

ヤコブも北のパダン・アラムでの 20 年間を通して、12 人の子供の父となりました。カナンにもどって来て、エサウとの再会と赦し合いを経験しました。それからは次第に子供達が、仕事を推進するようになりました。そうした年月における、最大の悲しみは特愛するヨセフを失ったことでしょう。あれから、20 年余り。ヤコブも老境へと入り、今回の飢饉についても対策方針は決めたものの、具体的行動は息子達に任せるしかありませんでした。エジプトへの食糧調達については、単にお金ではなかなか解決がつかず、あれこれと配慮しなければならないのです。そして、今回は愛するベニヤミンを、同行させなければならないという、つらいこともありました。しかし、ユダをリーダーとする今回のエジプト行きは、その任務が果たされたようです。子供達は無事にもどってきました。ベニヤミンも無事なようで、一安心でした。ところが子供達からの報告には、大変驚かされました。死んだはずの息子ヨセフが生きていて、エジプトの宰相になっているというのです。そして、自分達を呼び寄せたいというのです。それも神がそのように導かれたと言っているというのです。

既に天に召されたハリス宣教師が、証してくれたことがあります。「20 年の間、ずっと祈ってきた人が、救われたのです！キリストの救いにあずかったのです」と。一つの課題について、20 年間も祈り続けるということは、相当に忍耐が必要です。「(愛は) すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます」(I コリント 13:7) とありますが、アガペーの愛 (神の愛) をいただく時に、私たちは祈り続けさせていただけなのです。その答えがどうなるのかについては、私たちの領域ではありません。主の領域です。あとは、主にお任せするのです。

ヤコブはもはやヨセフが命をとられていると思っていたでしょう。しかし、20 年の年月を経て、人間の思いを越えた主からの励ましと慰めをいただきました。讚美歌 310 番の 3 節には「静けき祈りの、時はいと楽し、そびゆるピスガの、山のたかねより、ふるさとながめて、のぼりゆく日まで、慰めを与え、喜びを満たす」とあります。失望落胆することもあるでしょう。なかなか祈りが答えられずに、へこむこともあるでしょう。しかし、祈り続けたいのです。この讚美歌の「ふるさと」とは天の故郷です。そこにのぼりゆく日まで、信じ、期待しつつ、祈り続けていきたいのです。不可能と思われることであっても、大胆に主の前に願い求めていこうではありませんか。ヤコブの喜び、慰めが、私たちのうちにも与えられると、信じて進んでいきましょう。兄弟姉妹と励まし合

いつ。